所属： 石川工業高等専門学校　一般教育科

研究タイトル：

# HAVE 型 vs. BE 型所有表現の認知文法



| | | | |
|---|---|---|---|
| 氏名： | 川畠　嘉美／KAWABATA Yoshimi | E-mail: | kawabata@ishikawa-nct.ac.jp |
| 職名： | 准教授 | 学位： | 修士（文学） |
| 所属学会・協会： | 日本認知言語学会,国際認知言語学会,日本言語学会,日本英語学会 | | |





| | |
|---|---|
| キーワード： | 認知文法，所有表現，他動性／自動性，動詞アスペクト |



| | |
|---|---|
| 技術相談<br>提供可能技術： | ・<br>・<br>・ |

## 研究内容：所持型 vs.存在型所有表現及び周辺現象についての認知文法的考察

所有者と被所有物との関係を示す所有表現は、英語の have に該当する所持動詞を用いる所持型と、be に該当する存在動詞を用いる存在型に大きく分かれる。いずれの型が多用される傾向にあるかによって、前者が多用される場合はHAVE 型言語、後者の場合はBE 型言語などと呼ばれ、英語は前者、日本語は後者に当てはまる。本研究では、英語と日本語の所有表現を中心に、それぞれの傾向を導く認知背景を認知文法的アプローチで考察する。

HAVE 型構文と BE 型構文の大きな違いは、前者が他動詞を用いて＜所有者＞と＜被所有者＞の双方を項に組み込んでいる点、後者が自動詞を用い＜被所有者＞が存在対象として主格を担う一方、＜所有者＞が斜格として扱われている点である。この認知的背景には、＜所有者＞と＜被所有者＞の焦点化（profile）や、話者（＝概念化者）による関係の捉え方が関与している。

同時に、各構文で用いられる動詞のアスペクトも捉え方の差異を生む鍵となっている。所持動詞を例に挙げると、日本語の場合、存在型の「＜所有者＞には＜被所有物＞がある／いる」構文が多用される一方で、所持型の「＜所有者＞は＜被所有物＞を持っている」構文も使われる。ところが、英語の have 構文と日本語の「持つ」構文では容認可能な所有関係の幅に大きな開きがある。これは、have では動詞の結果相が焦点化されるのに対し、「持つ」では動作の実行場面寄りの相が焦点化されるという違いによる。ふたつの動詞に代表される傾向は、各言語の動詞の全体的特徴に通じるものであり、この点においても、日英語の捉え方の違いが浮き彫りとなる。

さらに、所有表現は、＜被所有物＞の譲渡性、非譲渡性が長年の議論のテーマとなっているが、以上の認知構造を援用することにより、＜所有者＞との一体性の観点から説明を加えることが可能となる。

以上のように、本研究では、所有表現にまつわる各現象の比較検証を行い、HAVE 型言語と BE 型言語の特徴を生み出す認知構造を類型的に提示する。

## 提供可能な設備・機器：

| 名称・型番（メーカー） | |
|---|---|
| | |
| | |
| | |
| | |
| | |